

「バクー国際フォーラム」
に招かれて
山中燐子
ケンブリッジ
大学客員教授・
元外務大臣政務官



10月4日と5日の両日、アゼルバイジャンの首都バクーで、第2回「バクー国際人文フォーラム」(BAKU INTERNATIONAL HUMANITARIAN FORUM)が開かれた。この会議は、昨年アリエフ大統領の肝いりで始まった。世界各地から、政界、学会、国際機関のトップクラスの人々が集う大々的な会議である。今年は、11名の前・元大統領、12名のノーベル賞受賞者が意見陳述を行い、8つの分科会が開かれた。



アゼルバイジャンとの縁は、2006年アリエフ大統領来日を担当したことが始まりだ。その後、日本の政府代表として公式訪問し、バクー大学で日本のPKO（国際連合平和維持活動）に関する講演も行った。さらに、2008年には、アリエフ大統領夫人主催の「国際女性会議」に基調講演者として招かれた。

また、今年6月に英国ケンブリッジ大学において開催されたケンブリッジ中央アジア研究所主催の「アゼルバイジャンデー」でも講演の機会を頂いた。この時の質問で印象深かったのは、「3.11の大震災の折、日本の首都東京は1000万人を超える人口を抱えながら、震度5の揺れの中で、死者がわずか3名であったのは驚異的だ。どうしてそのようなことが可能なのか？」という質問であった。もちろん、日本は、1995年の阪神淡路大震災での都市型災害の教訓として、耐震構造の推進、小学生も含む学校教育の場での防災教育などに取り組んでいる。しかし、出席者の皆さんは、異口同音に、すべての国民がそのような意識を持つことは、不可能であるとの反応であった。コーカサス地方は日本と同じ



ように地震地帯である。実は、防災面でも、日本はアゼルバイジャンに大きく協力できるのだ。

今回は、この国際会議での講演と、アリエフ大統領の肝いりで5年前に設立された「安全保障研究所」での講演、そして、シャリホフ副大統領との面談をはじめ、メメデヤロフ外務大臣との再会、メヘレモフバクー大学学長で日本・アゼルバイジャン議員連盟会長との意見交換、更には、帰途、空港への途中で農務副大臣との面談など、ほんの2日間の滞在ながら、びっしりのスケジュールであった。

さらに、思いがけないこ

とに、渡邊日本大使が北海道の小樽の出身で、懐かしい故郷小樽についても語ることができたというオマケがついた。

ところで、アゼルバイジャンは、18世紀から石油の採掘が始まり、旧ソ連の崩壊後、民主化路線を追及しつつも、ロシアとも親密な関係を保つという政治的なスタンスで、近年はトルコとの連携を強め、さらに近年、ポスト石油の産業として観光業などの発展に特化した政策を実現しつつある。

特に、エネルギー政策、食料政策、そして、環境政策の面で、ODA(政府開発援助)の卒業生として、日本





がビジネスを展開する機会に溢れている。にもかかわらず、残念ながら日本の存在は薄れつつあるのが現状だ。現在は、韓国企業の進出が著しい。麻生外務大臣が「自由と繁栄の孤」を提唱したが、その後、日本外交が停滞している間に、中国から中央アジアとコーカサスを経てトルコに辿り着く、いわゆるシルクロードは、今、着実に繁栄の道を歩んでいる。

不安定な国際社会において、コーカサス地方の安定は非常に重要だ。その意味で、この地域の安定の要はアゼルバイジャンと言っても過言ではない。地政学的に見ても、ロシア、グルジア、アルメニア、イラン

に接し、飛び地のナヒチェヴァンはアルメニア、イランおよびトルコと接している。さらに、カスピ海を見渡すと、ロシア、カザフスタン、トルクメニスタンおよびイランとの連携が必須である。

では、日本に期待されるのは、どのような分野であろうか？

ここで、3点挙げてみよう。

第一に、人材の交流・育成と研究・開発である。日本語教育もしっかり定着したバクー国立大学はじめ、大学生の交換、および、教授陣の交流の推進は期待される。国家の繁栄も国家間の連携も、すべて「人が鍵」である。特に、日本か

らは経済・産業分野を、アゼルバイジャンからは石油大学等の資源開発に関する分野なら、お互い学ぶ点が多い。また、石油産出国ではあるが、化石燃料からの脱却を視野に入れた再生自然エネルギー分野などでの共同開発も現実味を増してきた。

第二に、環境・平和構築の分野でも、協力できる。沿岸5カ国による「カスピ海経済協力機構」が発足したが、具体策はまだ示されていない。世界最大の塩湖の浄化は環境問題としても、非常に重要性を持つ。日本の得意分野である水の浄化技術などを、ビジネスとして展開できるのではないだろうか？カスピ海の浄化には地域の連携強化が必須である。すなわち、政治的な信頼醸成を構築するという副次的な狙いもある。そこには、当事者以外で、協力できる国の関与が期待される。その意味において、日本の技術と英国の外交力が協力し、この地域の安定に寄与できるチャンスがここにはある。

同時に、アゼルバイジャンはアフガニスタンに、はじめてPKOを送り出した。日本のPKO活動を参考にしたいとの思いもあるので、平和構築・平和協力分野での協



力や、地震地帯としての早期警告、安全対策なども分野での協力も期待される。

第三に、観光産業を梃子にしたアゼルバイジャン発展への協力である。ゴブスタン洞窟画はUNESCOの世界遺産に登録されているが、まだまだ、維持管理のノウハウは不十分だ。また、ゾロアスタ教（拝火教）の観光遺産としての工夫もまだまだ工夫の余地がある。さらに、アゼルバイジャンにはイタリアに匹敵する美

味しいトマトや、尻尾の長い果物のようなキュウリもあり、カモミールやミントなどのハーブ類も自然に生育しているの。実は、貴重な食の宝庫であるが、その大事さを少し忘れかけているように見受けられる。その意味でも、日本は灌漑用水などの農業支援をしているが、もっと、コーカサス地方・中央アジアの農業・食の安全保障の見地から、日本の協力が期待されている。丁度、撫子の種を持参

していたので、農業副大臣にお渡しした。いずれ、日本の撫子がアゼルバイジャンで咲くかもしれないと思うと楽しみだ。

今回の国際人文フォーラムで再訪問をしてみて、このアゼルバイジャンを核として、日本は、もう一度、この地域の重要性に思い致したいとあらためて感じた。◆